

共同研究報告

F D (ファカルティ・デヴェロップメント)

——大学における授業評価のあり方——

共同研究者

赤嶺淳 朝倉美香 佐野直子 やまだあつし

目次

1. 研究目的と意義 (佐野直子)
2. 共同研究者各自の取り組み
 - (1) 「アジア文化論」についての授業評価と自己評価 (赤嶺淳)
 - (2) 今年の講義「比較教育学」について (朝倉美香)
 - (3) 2002年度担当科目「社会言語学」において行った講義の概要と、実施した授業評価についての自己評価 (佐野直子)
 - (4) 「アジア経済論」自己評価 (やまだあつし)
3. 他大学における取り組み (やまだあつし)
4. まとめ (赤嶺淳)
5. 参考資料
 - (1) 「アジア文化論」シラバス (赤嶺淳)
 - (2) 「アジア文化論」講義内容に関するアンケート (赤嶺淳)

1. 研究目的と意義 (佐野直子)

近年の大学改革の流れは急である。国公立大学については特に独立法人化問題が大きくクローズアップされ、本学でも大きな話題となっている。その一方で少子化に伴う学生数の減少により、主に私立大学において大学改革が叫ばれ、様々な試みを実施されている。

本学においても、さまざまな形での改革が実行されているが、「大学制度」というハード面の改革以前に、教員と学生の最も重要な接点である講義・ゼミ・卒論指導などのソフト面における改革は、教員個人の努力に任され、実質的な改革には着手していないのが現状である。

本研究の目的は、講義の内容や受講学生の満足感を向上させるための授業評価システムについて議論し、それを実際の講義において実施し、その結果を次年度の講義やシラバス作成に活かす

ことである。このことは、今後の大学改革・講義計画・授業評価実施への契機にもなりうるのではないかと思われる。

従来、「評価」というのは教員から学生への一方通行（成績評価）であり、しかもその成績評価の基準もはっきりと公開されずに行われてきた。学生が教員を評価することなどは不可能である、また、学生が行う授業評価は人気投票にすぎず、それを気にするあまり学生におもねった講義になってしまうなどの意見が多かった。また、「授業評価」を人事面などに利用されることへの危惧も根強い。

しかし、「授業評価」とは、学生への成績評価基準の公開、教員同士の評価、学生から教員への評価、その公開（それによる外部評価）、それらの評価をふまえた講義の改善という一連のフィードバック機能の中で実施されるべきものであると考えられる。そうすれば、本学部がどのような教育を行うことをめざし、どのような評価基準によって学生に教育を行っているかが明確になるであろう。

本研究プロジェクトは、まず7月21日に、メンバーによって今まで自主的に行ってきた「授業評価」アンケートについて検討し、後期に行う講義における授業評価のあり方について考察した。アンケートの形式（記名式か無記名式か、選択式か記述式か）や内容（「この講義で何がえられたか」などについて書かせる、など）について議論が行われた。

その結果、そもそも教員があらかじめ半期の講義の目的と意義を明確にし、その目的にそった適切な講義を組み立て、講義の目的にそった適切な評価方法を決定し、そしてその目的・授業計画・評価方法（単にレポート何点テスト何点という配分だけでなく、どこまでできればAなのか、どのようなことが最低認識できればCで合格が可能なのか、など）を学生に公開しておかなくては、単に「評価」をしてもらっても意味がないという結論に達した。あらかじめこれらの点を明らかにしておくことによってこそ、学生はどのような基準で授業を評価すればいいかが明確になり、教員側も具体的な改善点について学生に意見を求めることができ、授業評価を来年度の講義の改善に活かすことができるようになるのではないだろうか。

これらの点を参考にしつつ、後期の講義において、メンバーはそれぞれ学生に授業評価アンケートを実施した。そして後期の講義の自己評価と、それをもとにした来年度の講義のシラバス案を作成し、12月21日に研究会を開いて検討を行った。それぞれの講義でおこなった授業評価実施結果と自己評価は以下に述べるとおりである。また、作成した来年度シラバス案は2003年度シラバスに掲載している。

2. 共同研究者各自の取り組み

(1) 2002年度「アジア文化論」についての授業評価と自己評価（赤嶺淳）

授業回数：11回，休講2回，補講なし。

受講生数：31名

参考資料：授業評価シートA4判1枚，授業構成案A4判2枚。

以下は、2002年12月17日に実施した授業評価に関するアンケート（回答29）を集計した結果を分析したものである。

授業構成

シラバスは、別紙参照。休講の2回は、授業案をたちあげる際から予定しており、休講を前提に授業案をくんだため、補講は実施しなかった。授業は、ほぼ講義案にそってすすめることができた。特記すべき変更点は、下記ビデオ『漂海民』をあらたに鑑賞し（11月19日）、東南アジア海域世界についてのスライドを鑑賞した（11月26日）点である。

授業は、「海」に生きる人びとに焦点をあて、「移動」と「接触」をキーワードに、アジア海域の歴史ダイナミズムをよみとき、国際社会のなかの一員として今後の日本社会のあり方を模索することを目的とした。具体的には、まず、大航海時代の端緒となった東南アジアと西洋社会との接触についての歴史的意義を東南アジアの視点から再検討した。そして同時代の中国世界と東南アジア、あるいは日本との接触・交流についてふれ、「鎖国」幻想を批判的に検討し、グローバルな人・モノ・金の移動が顕著な時代に国境を閉ざすことの非合理性を指摘した。

中心となるテーマ群は、①捕鯨問題、②、大航海時代の東南アジアと中国世界、③ウォーラセア海域世界の現在、④「鎖国」日本と中国世界の4つである。一部の学生からは、問題群のつながりがみえにくいとの批判があった。学生には、「つながり」を模索する思考力をもとめたいところでもあるが、批判にこたえる意味で、問題群のつながりについて簡単にふれたい。

①をとりあげた理由は、以下の3点である。まず、海域世界論を展開するにあたり、「海に生きる人びと」の多様性を知ることが必要である。次に、捕鯨・鯨食問題は、「固有の食文化保存とグローバルな環境保全の問題をどのようにあつかうのか」という地域の個性と地球市民としての一体性が複雑にからみあう問題を考える格好の素材である。最後に、捕鯨が、授業後半であつかう「鎖国」体制の日本をひらく端緒となった産業であるためである。19世紀に世界的に膨張した「捕鯨」熱が、結果的に鯨資源の減少をもたらしたことは周知の事実である。その後の石油資源への転換はもちろんのこと、現在の東南アジアで展開されている伐採跡地のアブラヤシプランテーションへの転換は、脂資源としての鯨油利用史を無視しては議論できない。

東南アジアの海域世界に、いわゆる「離島」は存在しないという問題設定は、大航海時代から世界がひとつになっていたことを意味しているのであり、それは今学期のアジア文化論を進めるにあたっての大前提であった。しかし、上記の一連の問題群のつながりを効果的に教授できなかった未熟さは、すなおに反省している。とくに、日本の開国とペリー来航、北太平洋の捕鯨・毛

皮交易、資源保護運動のつながりについて、授業の後半で再確認すべきであった。

たしかに日本史あるいは世界史を専攻してきた学生にたいして、グローバルヒストリーあるいは、脱西洋史観型の、アジアの視点からみたアジア史の構築は、むずかしい作業だったかもしれない。しかも、ほとんどの学生にとって、東南アジアは身近な存在ではなく、「なんとなく低開発な状況を喚起する」ていどの存在である。それにもかかわらず、「話題が新鮮で面白かった」との評価がおおかったのは、嬉しいとともに、東南アジアの存在感の薄さを実感せざるをえず、残念でもある。

補助教材として、『捕鯨に生きる』(40分)、『大航海—マラッカ・香料諸島』(83分)、『幻の漂海民』(42分)の3本を鑑賞した。前者2本は、商業ビデオを筆者が個人的に所有するものである。後者は1987年1月にTBS系列で放送された「地球浪漫スペシャル—光と風と!幻の漂海民」と題するものである。ビデオでは補いきれない視覚情報については、わたしが撮影したスライド写真をみせ、ウォーラセア海域とよばれる生態空間の現状を提示した。

ビデオを観た回には、学生に感想を書いてもらい、その好評をその次の講義の際におこなった。わたしの解説にくわえて、ほかの学生の感想を知る機会があったことは、学生にとっても興味深いことのようにである。また、「もう少し、つっこんだコメントがあってもよかった」との指摘があった。ビデオを観ることによって、授業内容が「視覚的にとらえることができよかった」という高評価がほとんどであった。しかし、改善点として、以下の2点が指摘された。83分のビデオは授業時間をフルにあてざるをえなかったため、複数回に区切り、ビデオについてのわたしの意見をふす。ビデオを観る理由について、事前に解説するというものである。今後の参考にしたい。

教授法

授業には大型地図を持参し、講義している地域を実感できるようにつとめた。これは、学生にも「わかりやすかった」と好評であった。くわえて、「トピックに応じた詳細な地図を配布せよ」との提案もあった。

資料は、捕鯨関係と鎖国論について、概説書の文献リストをはじめ、新聞記事、参考図書からの解説などを配布した。捕鯨問題はレポートを課したこともあり、それらの資料も利用されたようである。参考資料が充実した点を評価する学生もいた。資料が活用されるのであれば、もっと準備すべきであったと反省している。

リアクションペーパーのあつかいは、今後の改善・検討事項である。今学期、3回リアクションペーパーを書いてもらった。それらについてのコメントを次の回の冒頭に述べようにした。他学生の意見を自分の意見と比較することができ、理解を深めることができた、と好評であった。他方、「もっとコメントの時間をとって、多様な意見を紹介せよ」、「ビデオ鑑賞時だけではなく、毎回、リアクションペーパーを書くべきだ」との提言が少なからずあった。授業における時間配分と密接な問題であるため、どのように解決できるかわからないが、前向きに検討したい。

総合評価

アジア文化論を担当するのは2回目である。昨年とくらべて、わたしじしんは、授業内容について、おおむね満足している。初回にレポートを課したこともあってか、熱意のある受講生が集まったものとみうけられる。31名の受講生のほとんどが、1限であるにもかかわらず、熱心に受講してくれた。ありがたいことである。その背景には、国際文化学科という学科名にもかかわらず、「アジア」を冠した科目が少ないという事情もあるだろう（ほかには東アジアの歴史Ⅰ・Ⅱ、アジア経済論。いずれも展開科目）。今後も、学生の期待を裏切らないように努力したい。

上記の反省点にくわえて、東アジアと東南アジアをつなぐ、あるいは熱帯域と温帯域をつなぐ意味でも、亜熱帯域の琉球・沖縄をあつかえなかったことは、最大の反省点である。来年度以降、解消していきたい。

(2) 今年の講義「比較教育学」について（朝倉美香）

本年度の共同研究の対象として、比較教育学を取り上げた。比較教育学では、他国との関係で日本の教育のあり方を考察し、比較分析することを目的としている。そのため私の在籍する人間科学科の学生だけでなく、国際文化学科からも広く聴講がみられた（卒業単位となるため）。受講登録者は90名を超えたが、常時出席していたのは70名程度であった。

基本的な講義の目標は、(1) 比較教育学、国際教育学の現状についての理解、(2) アジア各国の教育について歴史学の立場も踏まえ、その状況を理解、(3) その他地域の教育について学生の関心に基づき言及するというものであった。

成績評価の方法は、授業への出席・参加30点、レポート40点、筆記試験30点の100点満点とした。

他国の比較研究を行う上で必要なのは、教育学に限らず学際的な幅広い視野と外国語の能力である。そのため本講義受講には基本的な文献の読解力・コミュニケーション能力を必要とし、レジュメや配布資料は英文、中国文のものも多かった。

講義の準備

去年とは全く違うテーマの内容で講義を行ったため、一から準備を行った。そのために毎週15時間は、文献調査、文献購読、レジュメ作成、印刷等の準備に追われた。2日間は1つの講義準備に追われていたことになる。現在私が取り組んでいる研究テーマとは講義内容が多少異なり、準備と平行して論文執筆を行うことは実際至難の業であった。そのため講義のために十分時間も労力もかけていると自負していた。

事後指導としては、学生に講義後提出してもらったカードの内容について次の講義に説明することが数回あった。

アンケート結果

最後の講義日に、学生70名に対して記名のアンケート調査を行った。授業の満足感、レジュメのレベル、授業の進行、授業の説明の4項目について、非常に満足している、まあまあ満足している、あまり満足していない、全く不満であるの4段階調査であった。このアンケートの趣旨は、講義の改善にあるとの説明も行った。その結果、次の点が明らかになった。

1. 過半数の学生は授業に対してまあまあ満足と評価した。しかし4分の1程度の学生はあまり満足していないと結論付けた。
2. 授業の満足感に比べて、レジュメの満足度は高かった。それはレジュメを多く配布したこと、そのための準備に多く時間を割いたことによる。
3. 結局、学生にとって私が行った講義の準備とはレジュメの準備のことであって、決して講義全体に配慮が行き届いたものではなかったことが明らかとなった。

それは学生が自由筆に講義の感想を対のように記したことからも推測できる。

①内容に興味関心を抱いたが、しかし準備されたレジュメ・資料・講義方法に問題があった。

黒板の板書をもうすこしまとめて分かりやすくしてほしい

②講義の性格もあり、「より具体的な問題提起（たとえば各国の教育事情のトピックを日本や世界的な教育の時流との関連で分かりやすく論じるなど）をしてほしい」「一国の教育史のような内容が多くて、現在その国ではどのような教育が行われているのかとか、そういう内容が少なかった」など、学生の興味関心より自分の守備範囲で講義を展開したことに対して不満の声が多かった。しかしこれに対しては、「もっと深く学びたかったなあという思いはありますが、それでは時間的に無理ですよねえ」との意見もあった。

このように広く各国の教育制度や状況を紹介したのは、幅広くいろいろな国の教育を知りたいという前年度の要望に応えたためであった。

また比較教育学の講義に何を求めるのか学生の関心によって評価が大きく異なることが分かった。逆に言うと、どの学生も授業につまづきを感じるよりは、何らかの形でこの講義に関心を持ってくれたことの表れともいえる。それでも「内容的には興味があるのですがどうしても眠くなります。分からないシステムなどが並ぶからでしょうか」という意見に対しては、具体的に教育制度に関する知識を事前に教授する必要性を感じた。

③「ビデオなどの教材をもう少し多く利用するとよかった」、「もっと視覚的に捉えられたらより印象に残ると思いました」、「時間の都合から映画、ビデオなどの教材を見る時間が中途半端であった」ことが提言された。視聴覚教材の用い方はその用い方如何によってその効果が大きく分かれるところであるが、初めて教育学を学ぶに等しい学生には視聴覚教材は行こうな手段であることは事実である。ただし実際に外国の教育を紹介する教材は市販されているものが少なく、そ

の分、教員個人が外国に調査に行く必要があると考える。しかし現在の研究課題と関係の浅い分野の調査のために、あえて講義のために海外調査する時間的経済的余裕がないのも現状である。

以上のことから、今後は「大学教育の歴史と今後の展望」寺崎昌男（日本私立大学連盟『大学の教育・授業の未来像』東海大学出版会、2001年3月、p.31）が指摘するように学生に対して「サポート」することが必要であろう。「学生が何を学ぼう、何を研究しようとしているかをしっかり理解し、そのために最も有効な方法は何かについてきちんとアドバイスをすること」が教員としての重要な責務であることを再度認識する必要性を感じた。また安岡高志「東海大学の組織教育について一単位の充実から問題発見・解決型の人材育成をめざして」（上掲書p.120）「東海大学には、学長の諮問機関の一つに大学評価委員会があり、その大学評価委員会にはさらに下部組織として教育評価部会、研究評価部会、管理運営評価部会がある」ように、本学でも早急に学内委員会を立ち上げ教育評価基準をつくり、全学の模範となるべき基準を設けるべきではないか。さもなければ個々の教員が個別に教育に尽力するだけである。

以上、この講義は居眠りをする学生が少なかったので高い評価を期待していたが、実際の学生の視線は厳しいものがあつた。講義に必要される能力のうち、最も時間をかけた授業準備が学生にはレジュメに対する準備とだけ受け止められたことに衝撃を受けた。

来年の講義は、学生の興味関心、能力、要望を加味し、専門教育とはいえ複数の学科の学生が受講することから、全15回の講義に一貫した理念が見出せ、なおかつ視覚効果を重視し学生の関心を維持できるような講義を行いたい。ただし藤井亀「授業評価アンケート調査の解析について」芝浦工業大学（上掲書、p.110）が「履修者が多くなると満足度が低下する」と述べるように、履修者が比較的多い講義であつたので学生と教員と距離が遠かつたのも評価が低い一因だと思われる。

（3）2002年度担当科目「社会言語学」において行った講義の概要と、実施した授業評価についての自己評価（佐野直子）

講義の目的

「ことばとは何か」という問いに対するアプローチとしては、もっとも新しくできた学問の一つである「社会言語学」の成立、その問題意識、その困難を通して、「ことば」の多様なあり方や、それをとらえる学問の枠組みに対する意識を高める。

講義内容

- 10/08. 「社会言語学」誕生以前 — 「ことば」はどうとらえられてきたのか
- 10/15. 「社会言語学」誕生以前2 — 「言語学」の流転
- 10/22. 「社会言語学」の誕生（方言学）

- 10/29. Variationist Sociolinguistics の展開 — イギリス、アメリカ
 11/05. Variationist Sociolinguistics の発展と限界
 11/12, 19 「言語紛争理論」 — スペイン、フランス、カナダ
 11/26 「応用社会言語学」 — 言語政策
 12/03 言語接触とその帰結 — ピジン・クレオール
 12/10 言語接触とその帰結 — 言語シフト・言語の死
 12/17 言語接触と話者
 1/14 談話分析・会話分析

なお講義は、後期火曜3限に実施し、履修者は35名であった。

教授法における工夫

講義の内容・キーワード・参考文献を書いたA4 1枚のレジュメをくばり、それにそって講義を進める。参考資料も毎回1〜2枚配った。映画、CDなども使用したが、適切な映像・音声資料があまりなかったのは残念である。

社会言語学は圧倒的に「欧米」の学問であり、また、歴史的な視点が欠かせないため、歴史的な状況の説明に多くの時間を費やした。また、社会学のさまざまなアプローチが直接間接に社会言語学のアプローチに影響を与えているため、社会学の解説もすることになった。

このような「学際的」な部門については、他の教員、他の学科の講義との接続などが欠かせないことを痛感する。具体的には、「社会学概論」「アメリカの歴史」「ヨーロッパの歴史」「ジェンダー論」「異文化間コミュニケーション論」「方言学」などである。それらの講義とリンクできれば、学生も視点に広がりをもてるのではないかと思われる。

学生への評価方法

講義後に配るリアクションペーパー60点、学期末テスト50点

リアクションペーパーは、講義の中のキーワード3つについて講義の最後にまとめさせ、その講義に対する意見、質問、感想などを書かせる(1回5点)。毎週添削して返却、でてきた意見や質問は次の講義の冒頭で説明する。

学期末テストはテスト内容は公表し、持ち込み不可とする。テストの内容は、講義で行ってきた社会言語学のテーマについて2つえらび、キーワードをいれて400字程度で説明するもの。また、ある社会言語学の教科書についている世界地図についてコメントを求め、オプション(特別加点)でマンガや会話文について分析をさせた。

リアクションペーパーを毎回書かせる目的は、日常点を重視して、集中して講義に参加してもらうことによって、誤解のない講義の理解を深めてもらうことである。試験は、全体的な「理解到達度」をはかることと、「社会言語学的な視点」をもってなんらかの対象を分析できるだけの

思考力を獲得できているかをはかることを目的とした。

学生からの授業評価の方法

学期末テストの最後に添付し、記名式・点数配分ありとする。理由は、履修する学生は35名と少なく、すでに顔と名前と筆跡が一致している状態にあるため、無記名にすることによるメリット（忌憚のない意見が書ける、など）があまりないことと、むしろ責任と主体性をもって履修した講義について批判してもらいたいからである。また、点数配分ありにした理由としては、アンケートの内容は記述式で、答えるためには学生にそれなりの負担がかかること、真面目で参考になる意見を書いたものは、講義にたいして積極的に参加してくれたものとみなせるからである。

授業評価の結果は、試験答案とその回答例と共に返却することを掲示した。新年度にとりに来た学生は半分ほどであった。

評価項目と、その結果は以下の通りである。

・講義についての感想・意見についてのアンケート（10点）

以下のアンケートについてあてはまるものに丸をつけて下さい。

また、それぞれにその評価をした具体的な理由を書いて下さい。

①講義の難易度はどうか

非常に難しい 13

非常に／ちょっと難しいの間 1

ちょっと難しい 17

適当 3

理由 内容が専門的・でてくる専門用語がわからない 11

スピードが速すぎる 7

抽象的・実感として捉えにくい 6

かなり頭を使わないとついていけない 6

90分という時間に対して内容が多すぎる 5

世界史を知らないので背景がわからない 2

やっていることが奥が深くて、いつまでたっても底が見えない

講義で分けられたテーマが密接に関係しており、理解できなかった

わかりやすい話題とやや理解しにくい話題両方あり、平均して「適当」

ちょっと難しいくらいが適当なのではないか

②講義はわかりやすくするように工夫されていたか

とてもされていた 7

まあまあ 23

いまいち 2

工夫されていない 1

理由 レジюме 9

リアクションペーパーの次週での補足説明 7

具体的・身近な例の引用 7

キーワードの設定 4

漫画や図などの使用 2

リアクションペーパー

同じ内容を文章を変えて表現した

わかります? Ça va?といていた

早口すぎ 4

進度が速すぎる 3

板書をもっとしてほしい/わかりやすく 2

一度聞き逃すと、もうわからない 2

つめこみすぎ

抽象的なことは図で示してほしい

③講義は興味深く、出席したくなるものであったか

非常に興味深かった 14

まあまあ 16

ふつう 2

あまり興味がわかなかった 1

理由 省略(他の項目と重複するため)

④補助教材は講義の理解を深めるために効果的に使用されていたか

とても効果的 15

それなりに効果的 14

あまり効果的でなかった 4

- 理由 地図や図はよかった・あると便利（バイリンガルの車輪の図など） 1 2
 具体例がわかりやすかった（映画・沖縄方言・SinglishのTシャツ） 7
 資料をみてもわからないものもあった 5
 資料について詳しくふれてほしい・資料まで手がまわっていなかった 4
 あとで見返したとき、講義を思い出すことができた
 講義のポイントが示してあって理解しやすかった
 それぞれの教材についての説明があったので、効果的だった
 もっと具体例がほしい
 解説を書き込まないと、なんの資料かわからなくなる
 いつプリントの例をみていいのかわからないときがあった
 あまりテスト勉強には役に立たなかった
 内容が多すぎて理解しきれない
 映像は楽しめたが、理解はあまり深まらなかった
 英語の資料はわかりにくかった

⑤講義の中で出される課題は適切な量・質であったか

- 多すぎ・難しすぎ 2
 ちょっと多い・難しい 1 5
 適切 1 7

- 理由 メモをとるのが大変・（速すぎて）聞き取れないことがある 8
 書く時間はもう少し多く 7
 内容が多すぎる 5
 内容が難しすぎる・消化しきれない 5
 小レポートがあると講義を一心に聞くという姿勢ができた 3
 3つの課題はちょうどいい 3
 あれ以上多いと時間が足りない
 学生がテンパるくらいが適切かも
 いきなり課題の説明になると焦る
 リアクションペーパーに費やす時間が多く、他の部分を聞けない

⑥この講義の満足度はどのくらいか

- 非常に満足 1 2

非常に満足とまあ満足のあいだ 1

まあまあ 19

ふつう 1

理由 省略(他の項目と重複)

⑦この講義で得られたものは何か

(自分の周りの) 言語に対する問題意識 9

「言語」について深く・学問的に考える機会 7

言語と社会の関わり 5

言語学の面白さ、他の学問との関連、抱えている問題 4

自分(マジョリティ/マイノリティ)と立場を置き換えて考える視点 2

言語を権利として捉える考え方

言語を生き物としてみる発想

言語エコロジーなどに対する複眼的な思考の初歩

専門的な分野でも「食わず嫌い」はよくないと痛感

物事を多面的に見る必要性

客観的・中立的な思考方法

学説を疑うこと

復習すること

大学生たるものの講義の聞き方・集中力

単位(予定)

出席することの大事さ

⑧この講義で改善してもらいたい点は何か

進行が速すぎる。もう少しゆっくり 13

内容を狭く絞った方がいい 11

早口。授業をするならもっとゆっくり話すべき 5

板書をもっとしてほしい 2

キーワードに映るときは指示してほしい・少し間をおいてほしい 2

もっと身近な具体例を挙げてほしい 2

一回にやる講義のテーマ・課題と授業回数・配分を計画的に処理してほしい

レジュメに書き込めるスペースがほしい

リアクションペーパーを書く時間を長くしてほしい

リアクションペーパーを提出するのは次の日でもいいのでは
言い替えたり、例を挙げたりなど話の工夫をしてほしい
映像をもっと使ってほしい
語句の説明が時々いいかげん
漢語の多用（漢語は口語にむいていない）

⑨講義において特に印象に残ったテーマや単元・小話は何か

バイリンガル（自分も広い意味ではバイリンガルなのか！など） 11

危機に瀕する言語・言語の消滅 8

ピジン・クレオール 5

会話分析・談話 3

New Englishes 3

バイオプログラム説 2

言語政策 2

言語エコロジー 2

ダイグロシア 2

言語と方言の関係（言語は数えられない）

イギリスの階級・地域と言語の関係

制限コード・精錬コード

言語接触

言語紛争

それぞれのことばと人々の社会と国家に対する概観

ダーウィンの進化論と言語の多様性

言語論的転回

「完全言語」

属地原則・属人原則

「30代女性は標準変種をしゃべりたがる」

ルクセンブルグのマクドナルドのお姉さんの多言語能力

沖縄の民謡

ヴィトゲンシュタイン

フランス語に対するオクシタン語

⑩そのほかになにか意見がありましたら自由に書いてください。

・リアクションペーパーは怠けず集中できるし、次の講義でわからないことをすぐ説明してく

れるのでよい。

- ・小レポートは毎回時間も短くて大変だったが、小さくコメントがついて返却されたりすると、ちゃんとみてくれたんだなあ、という気がして単純ですが喜んでしまう。
- ・これからも熱い講義／全力投球の講義をがんばってください。
- ・毎回のレジュメお疲れさまでした。先生の苦労は私たちにも伝わってきたのでがんばって聞こうという気になりました。
- ・これほど熱心に授業をきいていないとついていけない科目は珍しい
- ・大変な講義をやり遂げたという達成感がある
- ・テスト勉強を予想以上に真剣にやった気がする。
- ・言語について語るにも言語を使わなくてはいけないもどかしさ。
- ・この世にはまだまだ自分の知らないことがいっぱいあるのだなあとおもいました。
- ・社会言語学という学問は、考えなければいけないことが多すぎて、考えれば考えるほどぐるぐるしてしまうものだとわかった。
- ・社会言語学は学問の体系としてはとてもとらえにくいけど、地球規模のことから一人の人間の発話といったミクロなことまでが研究対象になるなど、他の学問にはないような気がして面白い学問だなあと思った。

など

自己評価、反省点

「社会言語学」の講義は2回目であるが、今回は「社会言語学」という学問のあり方全体を展望することをめざした。履修者の大半は1年生の時に筆者の担当科目である「言語と文化」を受けていることを前提としたものであったが、半年13回という時間の短さと、担当者の能力不足により、十分に消化したものとはいききれなかった。当初予定していた内容全ては出来なかったし、かなり急いだために理解が十分でない箇所もあったようである。「むずかしい」「はやい」「内容が多すぎる」という意見が非常に多かった。

また、シラバスを作成した時点で十分に講義計画が練られていなかったため、講義の進行がシラバスに掲載していたものとはかなり異なったものになってしまった。講義時間も遅れがちになってしまい、最後の講義が駆け足になってしまったことも反省点である。

講義の手法としてリアクションペーパーを使ったことは効果的であったと思われる。最後の10分をペーパー執筆にあて、最初の15分から多いときには30分を前回のペーパーの解説にあてたため、講義の進行が遅れる原因となったが、学生の理解度や感想、興味を持つ点をすぐに確認でき、どこが説明不足であったかなどを次回に埋め合わせることができた。学生も真面目で、多くがほとんど全回出席し、リアクションペーパーも誠実にかいてくれたことはありがたかった。この方式は次回も続けたい。

評価方法としての期末試験は、学生が半年の講義を十分に理解しているかをはかることを目的としたものであったが、学生が「受け身」な授業態度、勉強方法になってしまう、という問題が生じた。また、本講義では、抽象的な議論や学生があまり知らない地域の問題を多く扱ったため、学生たちが遠い話とうけとめている印象も強かった。筆者が「日本の社会言語学」に精通していないという技術的かつ根本的な問題があるが、学生にとってより身近な問題から始め、その問題がより広いパースペクティブをもつことを実感できるような講義の進め方を検討しなくてはならないと感じた。

そのためには、身近で具体的な例を挙げて調査・分析してもらおうといった課題を出すことによって、より主体的に言語について関わり、考える姿勢を身につけてもらうような方法も考えなくてはならないだろう。

(4)「アジア経済論」自己評価（やまだあつし）

講義について

講義内容は、シラバス段階から「アジア経済論」を掲げて「開発経済論」を語るものであった。実際の講義から見れば「国際関係論」の題名が適していたかも知れない。これは確信犯としての変更である。アジア経済の現状も大切には違いないが、それよりも日本史理解が不十分な学生達に戦後日本史と戦後日本の国際関係の重要性（とそれの現代への影響）を気づかせた方が良く考えた。日本史や日本の国際関係を語る時、アジア経済は当然のように触れるので「アジア経済論」にも一応なっているし、講義の成果も十分だったので問題ないと思う。

講義成果としては、援助が単なる慈善でなく、援助国・被援助国の外交や内政と緊密に結びついていることを、学生諸君に認識してもらえたと思う。また、日本の戦後経済の復興は単純なものでなく、占領政策の変化などに左右された偶然性の高いものであったことも認識してもらえたと思う。これらの認識は学生諸君が、輸出入産業に就職すれば否応無く触れるであろう中国を含むアジア諸国経済、についての理解（その国の経済が、日本からの援助を含めどのように形成されたか）と付き合い、に対し（もし講義を覚えていればだが）微力ながらプラスになろう。

しかしながら、シラバスに記したことと実際の講義とはずれがあった。シラバスでは「経済援助がその国の経済にどのような影響を与える（与えた）のかを、水利（用水路・ダムなど）や交通を事例として、日本の援助と日本が受けた援助を比較しながら考えてもらう」と記したが、日本が受けた援助が戦後日本経済へどう影響したかについては講義できても、日本の援助は「援助概論」の段階に留まり、被援助国の経済にどう影響したかは講義できなかつた。別の言い方をすれば、「日本の（アジア諸国への）援助」についての講義は、「日本が受けた援助」の講義を理解するための準備に留まった。

講義の自己採点は以下である。シラバスを基準にすれば、「日本が受けた援助」については初回でこれだけ言えれば十分ということで満点を与えて良いが、「日本の援助」については「概

論」としてはまずまずであるし、「日本が受けた援助」の講義についての準備としては良かったとしても、シラバスの狙いに達していない。よって70点である。

学生からの評価方法

毎回の講義でアンケートを行った。アンケートは、記名式・自由記述である。そこで、講義の問題点も書いてもらった。幸い、記名式であっても躊躇する学生はなく、内容がわからないところは「わからない」、図が込み入っているところは「図がまずい」、内容でなくその回の講義意図それ自体がわからないところは「講義意図を次回に説明して欲しい」、そしてマイクを通した声が大き過ぎれば「声が大き過ぎる」、と率直に書いてくれた。

アンケートに対し、個別質問には直接答えていないが、可能な範囲内で対応した。特に内容について「わからない」が多かった第3回講義（アンケート2回目）の「顔が見える援助」の話に対しては、第4回講義の大半を使って新資料（ムネオハウスの新聞記事など）を使って説明した。また講義意図がわからないとの声があった第7回講義（アンケート6回目）の「中国から見た援助」の話に対しては、第8回講義の後半1/3を使って、なぜここ（ちょうど講義前半各回の「日本の援助」と、後半各回の「日本が受けた援助」の中間点で中国の話をするのか（別の言い方をすると、なぜ中国の話ができないのか——理由は幾つかあるが、例えば中国の話題では与えられた時間内で援助と汚職の話まで語れないから——）説明した。どちらも学生達の理解を得たと思う。

アンケート方式の問題点として、まず考えられるのは実質講義時間が短くなることであろう。講義が延びてアンケート執筆時間が昼休みに食い込むことは学生諸君の不興を買う。これは、去年の講義アンケートで体験済である。よって、90分の講義時間があっても、実質60分強しか使えない。ただし、講義の成果を、講師の議論を聴衆がどれだけ理解し血肉と化すか、で測るとすれば、長時間に内容を詰め込むことは決して得策でない。短時間で少ない内容であっても確実に聴衆（学生）に理解してもらうのが望ましい。学生の現状を考えると講義は実質60分強で、後はアンケートを書きながら今日の講義を反芻させる方がむしろ適切ではないかと思える。

次の問題点として、アンケート方式の適正人数はどこまでかである。今回の「アジア経済論」はアンケート枚数が約50枚（登録学生数60人、うち参加学生数55人）であった。正直言って枚数が多い。全部を見ることはできるが、全部を詳細に評価することはできない。まして個別質問には答えられない（去年は個別質問に答えようとして時間を取られ、講義そのものの準備が不足してしまった）。アンケートを個別評価するなら、適正人数は30人までだと思う。専門の講義はこれ以上人数が増える恐れはないが、教養の講義については受講者数に制限（来年度シラバス参照）を掛けることにした（30人が望ましいが、他の講義との兼ね合いもあって60人とした）。

アンケートと成績評価との関連だが、（去年は結び付けなかったが）今年から密接に結びつけることとした。というか、アンケート＝出席点≒成績、という形にした。理由の一つは来年度シ

ラバスに書いた。他の理由として、大学の現状では講義について学生の予習復習を期待することは困難であるので、講義に出来るだけ出席させ、できるだけ講義時間内で考えさせたいということがある。なお成績評価をする関係上必須の「記名」ということについては、現状を見る限り苦言も含めずいふんと書いており、「記名」によって書けなくなることはないと思われる。ただし、現状のように講義内で書き終えさせるか、次回講義での提出を認めるか、についてはどちらが効果的か考えあぐねている。

次回講義での目標について

今回のシラバスの狙いは、講義時間や学生の水準（経済についての基礎知識が不十分）から見て、半期の講義には過大であったと思える。次回（再来年度）は、時間に見合ったシラバスに直す必要がある。援助を語るとすれば、被援助側の汚職まで踏み込める方が面白いので、今回同様「日本が受けた援助」に重点を置くことになるだろう。単に踏み込みなら外国が舞台でもできないわけではないが、汚職の背景を学生諸君に理解してもらうとなれば、日本以外選びようがない。すると今回同様、「日本の援助」については「援助概論」的内容に止めざるを得ない。よってシラバスの修正は、「日本の援助」の記述を内容相応に下げることで行うのが妥当だろう。

「国際関係論」的内容になったことについては、他学科で編入生を受け入れ続け、かつ本来の「国際関係論」が隔年開講（たまたま「アジア経済論」と交互開講である）であることを考えれば、今後も「アジア経済論」を受講して「国際関係論」に読み替えないと卒業できない学生が出てくることは十分予想できるので、「アジア経済論」から外れすぎない限りにおいて、歓迎されこそすれ問題はないと思われる。

次回の講義手法について

今回の援助というテーマは、初めて講義する内容だったため、講義で語る準備こそできたが、資料提示に問題があった。特に板書の図が錯綜しがちだったのは問題だった。次回は図はできるだけ事前に整理して、レジュメに入れておきたい。

3. 他大学における取り組み（やまだあつし）

はじめに

本稿の狙いは、授業評価への取り組みなど、他大学における大学教育のソフト面の改善についてまとめ、今後の授業改善に少しでも役立てることにある。

佐野が「研究目的と意義」で指摘しているように、日本の大学は近年、制度などハード面での改革が進んでいる。その改革の前途は決してバラ色ではない。しかしながらテレビや新聞の報道にもしばしば大学制度の改革は登場している。大学とは無縁な一般社会の人々にも、何か大学は

制度改革らしきものをしてしていると認識されているものと思われる。

一方でソフト面、佐野の言葉を借りれば「教員と学生の最も重要な接点である講義・ゼミ・卒業指導など」は、「教員個人の努力に任せ、実質的な改革には着手していないのが現状である」とされる。大学内の教員がそう認識しているのだから、ましてや大学外では、大学の講義は十年一日の如く、変化がない認識されているものと思われる。

しかしながら、大学教育について調べてみると、ソフト面で変化がないというのは、一面では真であるが、一面では当たっていないことがわかる。個人の努力ももちろんだが、大学の組織としても教育のソフト面の改革に取り組んでいるところがある。また、ソフト面での改革の成果は、すでに利用しやすい形で広く公開されている。本稿では、そのような取り組みの中から、広島大学高等教育研究開発センターの取り組みと、名古屋大学高等教育研究センターの取り組みを紹介したい。

広島大学高等教育研究開発センターでの取り組み

広島大学高等教育研究開発センター（以下は広センターと略 <http://rihe.hiroshima-u.ac.jp/>）は、日本で最初に設置された大学・高等教育に関する研究のための専門機関として、組織として大学教育のソフト面の研究改善に取り組んでいる。広センターのWEBによると目的は

大学内外の研究者並びに機関の協力による大学・高等教育に関する基礎的並びに開発的研究の推進

本学の大学改革の推進と調査研究並びに自己点検・評価や授業開発等の活動への協力

国内外の大学・高等教育情報・資料の収集整理と対外的な情報提供サービス

大学・高等教育研究者並びに高等教育専門的従事者の養成と各種研修事業の推進

となっている。そのために、広センターは、広島大学自身の自己研究を行うのはもとより、広く国際社会に開かれた高等教育研究所として、多彩な活動を行っていると自己紹介している。

さて、大学教育における授業評価についても、広センターは研究を行い、論文・叢書などを刊行している。古くは1984年に、広センターが刊行した『大学論集』13集（1984年12月）に、黒川正流「一般教育と学生の意識——新入生の態度変容と授業評価——」が掲載されている。また、広センターは外部の研究者を招いた公開研究会を毎年複数回開催しているが、1988年度において「東海大学における学生による授業評価の試み」（安岡高志，東海大学教授）という公開研究会を、『教育改革の方法を考える—Faculty Developmentの観点から（その2）』というテーマの下で行っている（これは後、広センターが「高等教育研究叢書」第2号として、1990年3月に刊行した関正夫編『大学教育改革の方法に関する研究—Faculty Developmentの観点から—』に、安岡高志「東海大学の教育改革—学生による講義評価の試みを中心に—」として掲載されている）。

広島大学の教育自身での授業評価については、少し遅れるが、有本章・山崎博敏編『学部教育の改革と学生生活—広島大学の学部教育に関する基礎的研究(2)』（「高等教育研究叢書」第40号、

1996年3月)の有本章「序章 学部教育改革の現状と課題——学生の授業評価を読む——」などに掲載されている。このように、「授業評価」は今から15年も前から、日本の大学組織の研究対象の一つとして行われており、我々はその成果を、今でも利用することができる。

授業評価には直接関係ない部分でも、広センターの活動に我々にとって有益な部分が多々ある。共同研究終了後の記事で恐縮であるが、広センターは最近「センターレポート」として最新動向をWEBに掲載している。例えば、隣国でかつ教育研究と活動支援については日本より進んでいるとされる韓国での動向が、「韓国FD・SD調査——専門大学教育協議会主催ワークショップに参加して——」（記事投稿日2003-07-11）として掲載されたり、教員任期制についての岐阜薬科大学と北陸先端科学技術大学院大学の動向が、「大学教員の任期制に関する訪問調査——任期制の導入過程とその後の状況に関するヒアリングの報告——」（記事投稿日2003-08-11）としてWEB上で報告されている。

このように、古くから組織的に、授業評価を含む大学のソフト面での研究改善に取り組み、かつ最新の動向を絶えずWEBに報告している広センターは、大学教育における最新動向を分析し、自分たちの教育に活用する上で、無視できない機関であり、WEBサイトとなっている。

名古屋大学高等教育研究センターでの取り組み

名古屋大学は、我が名古屋市立大学の近隣にあり、大学規模も大きく研究資源も豊富である。もちろん教員数も多い。そして最近では、大学教育のハード・ソフト両面の改革・改善について、多くの取り組みがある。

その名古屋大学にあつて、大学教育のソフト面での改善取り組みの中心となっている機関が、名古屋大学高等教育研究センター（以下は名センターと略、<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/>）である。WEBによると、名センターは1998年4月9日に「学内共同教育研究施設」として設置されたもので、「国際的な視野のもとに高等教育研究機関の戦略的課題の解決に貢献する」機関と自己紹介している。

このように名センターの歴史は新しい。しかしながら、その公開成果には注目すべきものが多い。最近のヒット作は、「成長するティップス先生——名古屋大学版ティーチングティップス——」（<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/index.html>）であろう。この「成長するティップス先生」は、「授業日誌」「授業の基本」「困ったときに」「情報への窓口」「みんなの広場」の5つのパートよりなり、若手の教師ティップス先生があれこれ悩み、トライし、失敗しながら一学期間の授業をどうにかやりとげるまでの「授業日誌」を初めとして、

われわれ教員が日ごろの教育活動のなかでしばしば出会う困ったこと、悩みの解決のためにちょっとしたヒントをさし上げようということです。とりわけ初めて教壇に立つ教員の方々に有益なアドバイスとなることを念頭において制作しましたが、経験豊富な教員にとっても、困ったことが生じたり、立ち止まって自分の授業を振り返り改善しようとするときに役

立つものになっているはずで。

と「はじめに」に書かれているように、とりわけ初めて教壇に立つ教員にとって、参考になる記述を満載している。

この「成長するティップス先生」にももちろん授業評価が取り上げられている。「授業日誌」の「7月17日 授業アンケートにおやおやの巻」で授業改善のアンケートには、その内容によって実施すべき時期がある（例えば、黒板の字が小さいかを最終回のアンケートで聞いても手遅れ）ことを示した上で、「授業の基本」の「9 自己診断から授業改善へ」「9.1.2 アンケートは自分自身の授業改善に役立つものを」にて、アンケートをとるねらいを明確にすることや、アンケートの質問項目を具体的、かつ簡単に答えられるものにするを説いている。また、

アンケート以外の方法で学生からの情報を得る工夫をするほうが効果的です。たとえば、リアクション・ペーパーに授業についてのコメントを求める、オフィスアワーを利用して学生との面談を行う、電子メールや電子掲示板を利用する、授業後教室に残って雑談をするおりに授業の進め方を話題にする、といった方法があるでしょう。

として情報を得る工夫を説いているのも注目される。

このように、名センターは創設こそ新しいが、授業評価を含む大学のソフト面での研究改善に意欲的に取り組んでいる。また、「情報への窓口」にあるリンク集にも、有益なリンク先が多い。よって、名センターもまた、大学教育における最新動向を分析し、自分たちの教育に活用する上で、無視できない機関であり、WEBサイトとなっている。

おわりに

私事になるが、私やまだ自身について振り返ってみたい。そもそも大学教育を行う立場に私がたったのは、幾つかの大学にて非常勤講師をした時からである。正直言って当惑せざるを得なかったし、うまく行かなかった。植民地の歴史に魅せられて大学院に入って以来、大学教育を行うことになる可能性が高かったにもかかわらず、教えるための教育は、大学院でも学外の研究会でも、一切受けていなかったからである。授業を評価する以前に、そもそもどうやって授業を組み立てるのかすら教育を受けていなかったのである。

仮に授業についての教育を受けてなくても、大学教育について関心があれば違ったかも知れない。私は広島大学の出身であり（大学院は大阪市立大学）、かつては顔見知りの先生が広センターに在籍されていた。その気になりさえすれば、これら機関の情報を早期に幅広く活用できたかも知れない。仮にそのような出身でなくても、もっと早期に情報に接することは容易だったかと思われる。今回、授業評価の共同研究に属したのがきっかけで、初めてこれら機関の情報に接したが、もっとはやく接すべきだったと後悔している。

とはいえ、これら機関の情報は、今からでも活用するに値する情報であり、授業評価についても、「成長するティップス先生」のように、工夫しながら成長してみたいと思う。

4. まとめ

本研究会の目的は、研究代表者の佐野が指摘するように、①教員による学生の評価基準を明確にし、それとともに学生にも授業を評価する機会を与える、②そのためにも、教員が授業予定の詳細をあらかじめ提示するとともに、授業案にそった授業を展開する、ということにあった。とはいえ、共同研究者は全員が、本学での教育に従事して、2年目（赤嶺・朝倉）あるいは3年目（佐野・やまだ）であるといった経験の少ない教員である。だからこそ、「公平な評価とはなにか」を議論するなかで、お互いの試行錯誤事例を交換しあえたことにより、メンバーそれぞれの教授技術を高上せしめたことも間違いない。

授業評価の項目は、各教員の扱う科目・受講人数ともにことなるため、各人が用意し、それを実施した。わたしは、前節で報告した「アジア文化論」のほか、「英語セミナー」（受講生25名のうち21名回答）でも、授業評価を実施した（2002年12月19日）。そのなかで、授業評価じしんについても意見を訊いたので、今後の課題をあきらかにするためにも、以下に紹介したい。

1) 授業評価の実施について。特筆すべきは、回答者21名全員が、学生による授業評価を肯定したことである。もちろん本アンケートを実施するにあたっては、前週から予告し、授業への出席をもとめたうえで、アンケート調査の目的について、①昨今の文部省による授業評価指導、②わたしたちのFD研究会の活動主旨の2点を説明し、回答への協力を要請した。

「自分たちの意見が反映されることはうれしいことだ」、「ほかの授業と比較することができる」、「学校あるいは講義のバージョンアップのためには必要」、「教師と学生の関係は、ただ「教える」「教えてもらう」の関係ではない。教える方が受けるほうから意見、感想などを聞いて、教授法を改良するのは当然」といった意見がめだった。

2) 記名式・無記名式。評価の質をあげるためには、記名・無記名なのかも問題となる場所である。このことについて、「どちらでもよい」3名、「記名」6名、「無記名」10名、「わからない」2名といふように、無記名希望が半数をしめた。記名を希望する学生は、「自分の意見を述べる以上は、当然のこと」と考えており、無記名を希望する学生は、「コメントと成績が連動されうるのではないか」との疑念をもつようにみうけられた。

3) 授業評価の実施時期。現在は、学期末に1度おこなうことが慣行となっているが、それはなぜなのであろうか。実際に学生からも、「進行中の授業を改善するためには、中間に1度、学期末に1度の2回おこなった方が効果的ではないか」、「来年度用という点も理解できるが、わたしたちの講義はどうなるのか」との指摘もよせられた。このことに関して、共同研究者のなかには、リアクション・ペーパーという形式で、授業毎に質問・コメントをうけつけている、という報告もあった。一律のフォーマットによる授業評価ではなく、授業評価の目的にそった評価形態を開発・実施するという柔軟な姿勢がもとめられている。

4) フィードバック。上記3)とも関連するが、実施した授業評価をいかに学生に還元すべきであろうか。来年度以降の授業の参考とすることはいうまでもない。この点に関して、わたしは、最終週の講義で、自己分析をA4版2枚にまとめ、学生に配布するとともに、口頭で説明した。成績の基準や試験結果をふまえた成績別の人数開示とともに、学部掲示板を使用してもよかっただろうし、個人のホームページを利用してもよかつたかもしれない。

繰り返しになるが、授業評価を実施するにあたっては、「何のための評価か」を明確にしたうえで、学生に積極的な参加をもとめる必要がある点を指摘しておきたい。今回、わたしたちは、①教員個人の教授技術を高上させるためのもの、②関与者として授業を評価することは義務といった前提で、学生に参加をもとめた。しかし、このことは、授業評価じたいが馴染みやすいこともあって、徹底できたとはいえない。本学における授業評価を効率よく実施していくためには、教務委員会が統一のフォーマットを作って、形式的に実施するのではなく、授業の目的と評価の目的を、明確にしたうえで、各教員が自主的にとりくむことがのぞましい。

5. 参考資料

(1)「アジア文化論」シラバス

講義の目的

日本から中国、東南アジアにかけての地域の歴史を「海」から眺めることによって、現実にくりひろげられてきた多様な生活像をみいだすとともに、わたしたちのライフスタイルを考える機会とする。

概要

「アジアは稲作の世界だ」といわれることがある。残念ながら、アジアの中心的な作物は、稲だけではない。稲作が「草の文化」だとすると、「木の文化」とよべる農の体系が存在するからである。その代表が東南アジア多島海に点在するサゴヤシ利用の食文化・文化複合圏である。これらの人びとは、林産物や海産物などの天然資源を採取し、それらを外部の人びとと交易することによって生計をたててきた。天然資源を採取しながら生活するということは、とうぜん、ある一定の場所に定住するのではなく、資源をもとめて「移動」することとなる。その顕著な例を、船を家とし、漁場を移動しながら生活する人びと（漂海民）の暮らしにもとめることができるだろう。

これらの「移動」生活は、稲を育て、その土地に「定住」する暮らしとは異なっている。アジア文化論では、香料や真珠、サンゴ、鼈甲、ツバメの巣、フカヒレなど、東南アジアからとくに中国世界へ輸出されてきた商品の開発史に焦点をあて、16世紀以降の東南アジア世界のなりたちを、「外部世界へ拓かれた」系として解説する。そして、そのような外部世界へ拓かれた視点か

ら、同時期（＝江戸時代）の日本社会を眺めた場合に、いわゆる「鎖国論」が幻想にすぎないことを指摘し、江戸時代の国際社会とグローバルな現代社会のあり方を比較検討したい。

鎖国論の批判的検討は、21世紀に生きるわたしたちに、グローバルな視野をあらためてあたえてくれるだろう。

第1回	10月1日	「海からみたアジア像」概論 「稲史観」と「海史観」、「草の文化」と「木の文化」、「中央主義」と「辺境主義」 鎖国論再考→グローバルな視野を拓くために 課題「なぜクジラを食べてはいけないのか」
第2回	10月8日	クジラは食べてもよい？
第3回	10月22日	ビデオ『捕鯨に生きる』（1998年シグロ作品、40分）
第4回	10月29日	東南アジア世界－森と海の世界 ウォーラセア海域世界、交易・香料諸島
第5回	11月5日	ビデオ『大航海－マラッカ・香料諸島』（1999年海工房、83分）
第6回	11月12日	「木」のパンを食う－木を食う人びと ヤシ、パンの実、キャッサバ、サゴ
第7回	11月19日	サンゴ礁の海
第8回	11月26日	中華世界と東南アジア
第9回	12月10日	中華世界と日本－鎖国概念の批判的検討
第10回	12月17日	まとめと試験問題発表
第11回	1月14日	試験

- 休講 ① 10月15日、フィリピン調査中のため
② 12月3日、国際シンポジウム出席のため

評価 授業中の参加態度（50）と試験（50）。たんに出席しただけでは評価しない。ここでの参加態度は、授業の最後に提出してもらったリアクションペーパーの内容をさす。授業の内容についての賛成、批判、質問など、授業へのフィードバックが可能なコメントを評価する。なお、積極的に授業に参加した学生で、講義内容を把握できたと判断できた場合には、期末試験を免除することもある。

参考文献

秋道智彌、1988、『海人の民族学－サンゴ礁を超えて』NHKブックス561、日本放送出版協会。

秋道智彌編、1995、『イルカとナマコと海人たちー熱帯の漁撈文化誌』NHKブックス745、日本放送出版協会。

羽原又吉、1963、『漂海民』岩波新書（青版）F70、岩波書店。

濱下武志、1996、『香港ーアジアのネットワーク都市』ちくま新書79、筑摩書房。

濱下武志、2000、『沖縄入門ーアジアをつなぐ海域構想』ちくま新書249、筑摩書房。

白石隆、2000、『海の帝国ーアジアをどう考えるか』中公新書1551、中央公論新社。

高良倉吉、1993、『琉球王国』岩波新書（新赤版）261、岩波書店。

鶴見良行、1987、『海道の社会史ー東南アジア多島海の人びと』朝日選書330、朝日新聞社。

鶴見良行、1994、『マングローブの沼地でー東南アジア島嶼文化論への誘い』朝日選書495、朝日新聞社。

鶴見良行、1993、『ナマコの眼』ちくま学芸文庫、筑摩書房。

ウォーレス、A. R.（新妻昭夫訳）、1993、『マレー諸島ーオランウータンと極楽鳥の土地』上下巻、ちくま学芸文庫、筑摩書房。

（2）「アジア文化論」講義内容に関するアンケート

今後の教育活動の参考資料とするため、2002年度後期「アジア文化論」についての授業評価をお願いします。授業の内容や進め方に関して、率直な意見をおきかせください。

1. 講義全体のレベル

- ・簡単
- ・ちょうどよい
- ・難解

理由：

2. 授業の進行のスピード

- ・遅すぎる
- ・ちょうどよい
- ・速すぎる

理由：

3. 内容の解説のしかた

- ・わかりやすい
- ・ちょうどよい
- ・難解（不親切）

理由：

4. 補助教材の使用

- ・適切
- ・不適切
- ・教材使用の意図がわからない

理由：

5. コメント (reaction paper) が、授業にいかされていた。

- ・ 思う
- ・ 不十分だった

理由 :

6. この講義を受講してよかったことはありますか。

7. 今後の授業で工夫すべき点は、どのような点でしょうか。